

万人から正しい見られる

モード

は語る

中野 香織

東京国立近代美術館で開催中の「あやしい絵」展は、平日の昼間でも多くの鑑賞客が押しかけ、熱気にあふれていた。

客間に飾っておけるような上品な絵は、ほばない。多くの絵には、怨念や嫉妬や絶望や無念や背徳といった、負の感情が渦巻いている。異界や死や空想の生き物、不気味な入れ墨など、闇のモチーフのパワーが放たれている。ゆえにマイナスを極め、あやういバランスでそれを魅力に転じている作品には、あやしい思いをかきたてられながらも魅了され、見終わるころには心が元気になる。

あやしい絵に熱気



異界の奥のパワーが充満する「あやしい絵」展

同時代には発禁になったおどろおどろしい絵もある。そんな絵によって自分の心が活力を取り戻したのは、近年の世間による「正義」の強制的圧力に、息苦しい思いをしてい

しかし、

左の絵は
甲斐左衛門「横櫛」
(上京都国立近代美術館蔵)

時代の「まともさ」に抵抗

たからかもしれない。少しでも「間違った」表現を発すると、SNSによって瞬く間に騒ぎが大きくなり、当事者は社会的地位を失う。だから表現に減点されないための神経をすり減らす。モードやその情報の送り手も例外ではない。各文化の差異に細心の注意を払い、SDGsを満たす姿勢を示さねばならない。全方向に配慮した結果、出てくる表現は、誰にも不快感を与えないけれど、心を素通りしていくものが多い。端的に言えば、なくても別に困らない。斬新な表現を試みれば、地球上の

こともある

近年、この手の

誰かの文化を思いもよらず傷つけて謝罪する羽目になる。インスタグラムが流行する2015年以降炎上が繰り返され、多文化に配慮した倫理的モード表現からは、生命力の輝きが失われつつあるように見えた。そんなくすぶりからいつとき解放してくれたのが、あやしい絵群だ。道徳観の強制への対抗意識として出てきたエロ・グロ・ナンセンス。美人画の対抗馬として描かれた、生々しい人間画。同時代の「まともさ」に抵抗する妄想。画家の心の奥底からの表現が、人間賛歌となって、後世の人々を鼓舞している。20世紀モードには対抗文化としての力があったが、今では、主流の道徳観の旗手となれという要請に応えようとしていくに見える。(服飾史家)

万人が正しいと見ることを目指す